

障害くじけなかった

脳性マヒ少女、両親と猛訓練

バイオリン弾ける

脳障害で全身がまひ、言葉もほとんど話せなかった京都市の十歳になる少女が、独特の機能回復訓練法で知られる米国のクレン・ドーマン博士の指導を受け、両親と一緒に猛訓練、体操や読み書きができるようになった。

バイオリンが弾けるまでに回復した。二十六日、少女の機能回復の足跡をたどる説明会が神戸市中央区の神戸国際会館で開かれ、脳障害児を持つ親ら約二百三十人が全国から集まり、体験談に聴き入った。



脳障害を克服し、自筆の作文を読む薬歩さんの声に参加者は熱心に聴き入った＝神戸市中央区の神戸国際会館で

少女は京都市西京区下津林一丁目、会社役員小西直樹さん(60)の次女薬歩(らぶ)さん。生後一月で受けた手術中、人工呼吸器にたんが詰まって一時、呼吸と心臓が停止したのが原因で脳性マヒになった。手足が自由に動かず、全身けいれんの発作のため、三歳になっても歩行や言語の発達が遅れていた。

六十年ごろ、小西さんはドーマン博士が主宰する人間能力開発研究所のジャパンオフィスが神戸市内に開設されたことを知った。同博士は落馬した元騎手の稲永洋一さんを治療したことで知られ、身体を猛烈に動かして、脳細胞を刺激するのが、その訓練法。米国に渡って博士から講習を受け、六十一年四月から、薬歩さんのための訓練を始めた。

手足をバタバタと動かすパターンリング、腹はい移動、腹筋の鍛錬など早朝から夜まで母親の

レイ子さん(60)が付きっきりで、一日十六時間にも及ぶ訓練を続けた。小西さんも、毎朝五時五十分に起き、出勤前に近くの公園で薬歩さんの歩行訓練に付き合った。訓練の様子にはビデオに収め、ドーマン博士のもとに送って、そのつと指導を受けた。やがてけいれんの発作もなくなり、一人で歩け、発声や理解する能力もめざましい進歩を見せてきた。

説明会ではジャパンオフィス所長の神戸市中央区の小児歯科医佐本進さん(53)がビデオで訓練の様子を紹介した後、小西さんが「健常児には当たり前の発達の過程を一つひとつ獲得してきた。あきらめないことが大切」と訴えた。薬歩さんも「何度もやめようと思ったが、早く学校に行けるようになって、みんなと遊びたい一心でがんばってきました」と自筆の作文を読み上げた。